

「垣根を越える」には二つの意味が

岩本進 北海道新聞記者

「垣根を越える」には二つの意味があると思っています。

一つは、立ちはだかっている障壁を壊して乗り越えること。もう一つは、障壁を乗り越えるための仲間をつくるためにステークホルダー間にある垣根を低くして手をつなぐことです。

垣根に立ち向かう動機や原動力は何か。

ある人は疑問や怒りかもしれません。ある人は「変えなきゃ」という強い使命感かもしれません。

今回の講義でコメントした、高波淳さんの「伝えないと新たな被害者が出てしまう」という言葉に、ものすごく共感を覚えました。

報道に携わる者は、目の前にある気づいた事実を(してはいけないと思いますが)、見過ごすこともできます。気づいた記者が目をつぶってしまえば、世間は気づかないまま。知らないままで終わってしまいます。だから、しっかりと目を開いて、重いときもあるけれど腰を上げて、取材する、書く。

これは報道だけでなく、大学院での研究も同様ではないかと、4月から学ぶようになって感じています。

さて、福場奨太さんは、今年5月に同僚記者がインタビューし北海道新聞の記事になっています。その中で最後におっしゃっていたことが記憶に残っていました。

患者さんとの関係について確か「心は私が支援者。でも私の視覚は患者さんが支援者。私が持つ医師免許はみんながいることで成立している」。こんな言葉だったと思います。

医師も障害があっても、五体満足でなくても、完璧でなくてもいいじゃないか。だから、患者さんや地域の人たちやコメディカルらと助け合いながら共に生きる。自然体のドクターだなと感じていました。

今回、画面越しですがお姿を拝見し、うれしくなりました。北海道・美唄にいらっしゃるということなので、今度一度訪ねたいと思っています。

後期もさまざまな講師の話をお聞かせいただきました。講師を選んで東京・赤坂まで引っ張ってくる、ゆきさんの縁の広さにも毎回感心しています。いくつもの気づきや勇気をいただきました。

本当にありがとうございます。そして、引き続き、よろしく願いいたします。